

この論文は著作者本人の許可を得て掲載して
ますが、著作権は著作者の許に存在します。**転
載を禁じます。**

誤植等が存在する可能性があります。また、本
文は執筆者より送られたテキストファイルをもと
に作成しましたが、雑誌掲載のテキストとの異同
が存在する可能性があります。この論文を研究論
文等に引用される場合は**必ず掲載誌から引用され
るよう**にお願いします。

引き裂く言葉

昭和一〇年代と織田作之助「夫
婦善哉」

西村将洋

掲載 『同志社国文学』 第五三号一九

本稿の目的は織田作之助「夫婦善哉」(『海風』昭15・4)の表現形態を同時代的な枠組みの中で捉え直し、昭和一〇年代に形成されていた一つの言語の表現形態及びそれを産出する意識形態を浮上させることである。とは言っても織田の作品をめぐる評価は発表直後から一定の枠組みが既に形成され、それを組み換える作業の障害となっているのも事実である。おおよそその評価の枠組みは次の二つに分類できる。一つは評者の側に予め 文学の形相が存在し、それをどう再現・表象するかに評価基準を置くもの。この形相には私小説やリアリズム、市井物の評価軸が交差している(注1)。もう一つは小説に描かれた思

想性を問うもの。これについては同時代評で特に旧左翼系陣営からの辛辣な攻撃がある（注2）。しかし、これらの評価基準は果たして正当だったのだろうか。

織田の旧友杉山平一は当時の織田への「悪評や黙殺」について、「可能性の文学」（『改造』昭21・12）発表後に「批評家は、はじめて織田作之助氏を見誤つてゐたことに気づきました」という回想を残している（注3）。

後述するように織田作之助は六年間の創作活動のその時々において暗に「夫婦善哉」について言及している。織田の「昭和一五年に「夫婦善哉」という小説を書いてから、今日まで六年間、私の創作態度は少しも変わっていない。」（注4）の言が示すように、「夫婦善哉」は織田にとって常に立ち返り意義を問い直し、新たな意味を産み出す場、つまり反復から差異を産み出す場としてあったのではなからうか。「夫婦善哉」と「可能性の文学」は同一の強度を保持していたと考えられるのではな

かるうか。ならば「夫婦善哉」という作品の評価は、いかに形相を描くかや、どの様な思想を読みとるかといった理念の問題ではなく、小説それ自体の方法性として分析される必要があるだろう。織田は「夫婦善哉」直後の「小説の思想」で、後の「夫婦善哉」の思想性の欠如という批判に答えるかのように、「小説の中の思想」は「二義的」であり、「小説の思想」こそが「アプリアリ」であると強調している（注5）。つまりそれは小説が思想の伝達物ではなく、小説そのものの一義性を有するという主張なのであった。

以下そのような問題系への手掛かりとして「夫婦善哉」自体の分析から始め、徐々にその分析対象を巨視的な関係性の網目へと再解釈してみたい。

橋本寛之は前掲「小説の思想」の主張を加味しつつ、「夫婦善哉」の舞台となった大正から昭和にかけての大阪の都市を分析している。そこでは大正一五年に着工され昭和五年に完成した地下鉄などが注目され、同時代的な「モダンな都市景観」を排除することで「夫婦善哉」が「架空の大阪」を描き出したことが論証されている（注6）。この指摘は「た意義あるものと言えるだろう。だがもう一方で小説自体の虚構性はどの様な次元でなされているのであろうか。

その点で最初に注目したいのが浄瑠璃との関連である。多田道太郎は次のように言う。

「夫婦善哉」は「三勝半七」（「艶姿女舞衣」）のパロディである。純情な正妻お園の気持ちをも、浮気男柳吉が口ずさみ、日陰者の女蝶子が怒り狂ってセリフの「後を続けてこましたるか」

「思えば思えばこのお園が、去年の秋の煩いに、いつそ死んでしもうたら」よかつたのにと古典の女は自分をせめるのに、蝶子のほうはあべこべに、浄瑠璃を口の中に収め、やおら亭主の折檻にかか。古典的世界をひっくりかえす逆転パロディである。(注7)

「夫婦善哉」発表以前の『はさすがたおんなまいぎぬ艶容女舞衣』

活字本は、『日本名著全集第二八巻 歌謡音

曲集』(昭4)と岩波文庫(昭14)がある。

名著全集の本文は「夫婦善哉」でも引用されている。「今ごろは半七さんが」(注8)の件をもつ「酒屋の段」のみを掲載しているが、岩波文庫版では全ての段が所収されている。もちろん当時も文楽座で『艶容女舞衣』は上演されてはいたのだが(注9)、「酒屋の段」が中心であっただけに岩波文庫の刊行は物語全体の流通という意味で意義のあるものだったと推測できる。

この「酒屋の段」以外の『艷容女舞衣』の物語と「夫婦善哉」との関連で注目出来るのは、「夫婦善哉」で蝶子が「新世界の八卦見」に柳吉との仲を占ってもらう場面である。

蝶子は興奮の余り口喧嘩までし、その足で新世界の八卦見のところへ行つた。「あんたが男はんのためにつくすその心が仇になる。大体この星の人は……」年を聞いて丙午だと知ると、八卦見はもう立板に水を流すお喋りで、何もかも悪い運勢だつた。(注10)

この場面で蝶子は「丙午」の俗信(注11)のため八卦見にさんざんに言われるのだが、この場面も『艷容女舞衣』「中の巻 新町橋の段」でお園が半七扮する「占い者」に自分と夫の仲を占ってもらう趣向と重なる。半七扮する「占い者」は「互に厄の祟りにてひとつに居れば大悪縁。やつぱり男の詞に付抱れ

て寝る方が女房の役。」（注12）と「夫婦善哉」の展開と同じく夫婦の離縁をせまるのである。

先の多田の言が示したように『艷容女舞衣』と「夫婦善哉」の夫婦関係は相関関係にあると言ってよいだろう（注13）。だが、この二つのテキストは先の多田の考察のように単なる「古典的世界をひっくりかえす逆転パロディ」の関係なのであるうか。その点で先の「丙午」や「厄」という干支と「夫婦善哉」との関係について前田愛の興味深い指摘がある。前田は「夫婦善哉」の蝶子が丙午の生まれで、小説の終わる時点の年齢は柳吉が四十三で後厄、蝶子が三十二で女の前厄であると述べ、「多分、丙午とからめて織田作はちゃんと書いているんじゃないか。」（注14）と述べている。この前田の言は「夫婦善哉」と『艷容女舞衣』の関連を考える際の有益な発言と言える。例えば、近松門左衛門『曾根崎心中』の冒頭が二一歳で厄年の天満屋遊女お初が十三番の観音巡りをする場面から描かれるよ

うに、「夫婦善哉」において干支は浄瑠璃との関連から物語の悲哀や哀憐を提示する機能を担っているのである。とするならば、「夫婦善哉」は必ずしも「逆転パロディ」の発想ではないことがわかるであろう。蝶子の側にも確かに浄瑠璃の世界は逆転されることなく浸透し、並存しているのである。また織田は「大阪発見」の中で「めおとぜんざい屋」のある法善寺境内を「神仏のデパート」と述べ、弁財天や不動明王など様々な信仰が混在する雑居性の場と位置付けている（注15）。すなわち「夫婦善哉」の志向する場とは複数の物語の混在する空間なのではなからうか。

したがって、先の「夫婦善哉」と『艶容女舞衣』の関連もそのような文脈から再解釈する必要がある。そこで問題となるのは『艶容女舞衣』の物語の全体である。つまり「元禄八年一月六日の夜、大阪長町四丁目の美濃屋平左衛門の養女おさん事芸名三勝と大和五条新町の赤根屋半七とが大阪の下難波村の千日

墓所南側の石垣の下で情死した」（注16）という実話に基づくごとく、『艶容女舞衣』でもその後半七は妻お園を捨て、三勝と心中するという物語の展開が最後に構想されているのである。つまり「夫婦善哉」において『艶容女舞衣』が下敷きにされるといふ虚構化は、心中による夫の死と夫婦の別離という悲哀の物語内容を「夫婦善哉」の物語内容をも含めて共示していることになるのである。つまり「逆転パロディ」ではなく正反対の物語内容が同時に表象されていることになる。このことは、前述した「めおとぜんざい屋」のある法善寺境内が複数の物語の雑居する場であったことと符合するであろう。

さらに「夫婦善哉」と浄瑠璃との関連を考へる際に見逃せないのは、作品の物語の最後で一行空けられ、独立した形で物語を締め括る次の挿話である（作品内で物語の場面が転換される時以外に、このような独立した挿話が語られるのはこの部分だけである）。

蝶子と柳吉はやがて浄瑠璃に凝り出した。二ツ井戸天牛書店の二階広間で開かれた素義大会で、柳吉は蝶子の三味線で「太十」を語り、二等賞を貰った。景品の大きな座蒲団は蝶子が毎日つかった。

(完)(注17)

この箇所をめぐっては先行研究でもその有無について賛否両論が別れるが(注18)、「夫婦善哉」における挿話とはそれぞれが不可欠な部分として解釈される必要がある。

その点の事情は大阪府立中之島図書館織田文庫所蔵の「夫婦善哉」草稿(一三二一枚)(注19)によって幾分か垣間みることができ。

草稿の中の「5」と頁数の記された原稿の内の二枚(注20)には「種吉は卒中で死んだ」と記されている。初出「夫婦善哉」で死

んでしまうのは蝶子の父親種吉ではなく母親お辰であり、その病因は子宮癌である。また

その他界の場面は物語の終盤に描かれている。更にこの二枚には従来大阪の「うまいもん」を描いたとされる「夫婦善哉」の中に京都円山公園内の「芋ぼう」屋の記述を見ることがもできる。また「10」の頁数が付く内の一枚（注21）には蝶子を「マダム」と呼ぶ場面も描かれている。初出「夫婦善哉」では蝶子が「マダム」と呼ばれるのは小説の後半部にあたり、「10」という書き出し部分で呼ばれることは考えられない。このことから類推できるのは「夫婦善哉」執筆には最初に複数の挿話が構想され、それをどのように取捨選択し組み合わせるかに主眼があつたということである。その意味では、敢えて独立した挿話として記されている最終部の挿話は意図的に構成された不可欠のものとして解釈されなければならぬだろう。

そこで、これまでの分析の「夫婦善哉」が複数の物語を同時に表象しているという文脈を加味するならば、次のような読解が成り立

ち得る。つまり柳吉と蝶子が奏でる「太十」
（浄瑠璃『絵本太功記』十段目の略称）もまた、先の武智十次郎光義と許嫁の妻初菊の夫婦は夫の討ち死によつて今生の別離を遂げるという物語が配置されているのである。「艶姿女舞衣」と同じくここでも浄瑠璃の夫婦の別離という物語が下敷きにされ配置されている。

夫の討死遊ばすを妻が知らいで何とせう。二世も三世も女夫ぢやと思つてゐるに情ない盃せぬが仕合せとは。余り聞こえぬ光義様。祝言さへも済まぬ討死とは

曲がない。（注22）

つまり「夫婦善哉」はそれ自身の物語とともに、その背後に悲哀な夫婦の別れの物語を複数織り込むことで成立しているのである。

通常、二重にテキストが重ね合わされる場合一方のテキストは他のテキストに対して注釈

的機能を果たし、プロットは一方に収縮するが、ここでは物語の結びが必ずしも単一なプロットへの収縮を遂行してはいない。テクストは表層的に二人の夫婦像を描きながら、かつ悲哀の物語をその下に織り込む。それは二つの物語の裂け目を表象する言葉として位置付けることができるだろう。

三

さらに「夫婦善哉」の問題の領野を広げるために井原西鶴との関連について考えてみることにしたい。「夫婦善哉」発表後、織田は『西鶴新論』（修文館、昭17）を執筆している（注23）。この『西鶴新論』における西鶴と「夫婦善哉」の連関性については『西鶴新論』の同時代評から既にその指摘がある（注24）。「夫婦善哉」研究でもその点については多々言及されるのであるが（注25）、では「夫

婦善哉」が西鶴に影響を受けたと言えるのか
というところ、実状はそれほど単純ではない。な
ぜなら「わが文学修行」(『現代文学』昭18・
3)で織田は「西鶴を本当に読んだのは「夫
婦善哉」を単行本にしてからである。」とい
う言を残しているし、このことは「夫婦善哉」
発表直後の昭和一五年五月六日付の杉山平一
宛書簡でも「西鶴とは意外だが、べつに異を
たてぬ、真似たつもりはない。」(注26)とい
う織田の言からも読みとれる。恐らく杉山か
ら西鶴と「夫婦善哉」の類似について指摘さ
れ、このような返答をしたのであろう。

では織田は「夫婦善哉」執筆にあたって西
鶴を読んでいなかったのだろうか。結論から
言えば、織田は西鶴を読んでいていたが、ま
た同時に読んでいなかったのである。この逆
説を説明するには一冊の書物を取り上げる必
要があるだろう。谷崎潤一郎『文章読本』(中
央公論社、昭9)(注27)である。

『西鶴新論』では文学者から国文学研究者、

そして海外作家を交えて総勢三〇人以上の人物の文献が用いられている。その中で谷崎の引用は「三、大阪人的性格」での『饒舌録』（改造社、昭三）と、「九、西鶴の文章」での『文章読本』のわずか二箇所である。しかし谷崎の署名の無い部分にも『文章読本』の課した規則と近似した文面を読むことができず。『西鶴新論』「三、大阪人的性格」を引いてみる。

（西鶴は・・引用者注）露骨に、徹底して、執拗にあるがままの人生を描いたのだ。彼はある観念を強調するために、書いたのではない。見たままの人間の生活を、執拗に繰りかへして、書き続けたのだ。（略）もとより、さうした繰りかへしからは、いはゆる発展は生れないであらう。（略）しかし、この発展を無視した繰りかへしの中に、全然意識がないと、言ひ切つてしまへるかどうか。少く

とも、西鶴にあつては、この執拗な繰りかへしは一つの人間謳歌の逆説的な表現なのだ。(注28)

ここでは唐突に「繰りかへし」という反復の機能が重視されるのだが、この部分は『文章読本』「二、文章の上達法 感覚を研く」と「の次の文脈と類似している。

文章に対する感覚だけが先天的に備わつてゐるのであります。しかしながら、これは生れつきの能力であるから、後天的には如何ともし難いものと云ふのに、決してそうではありません。(略)多くは心がけと修養次第で、生れつき鈍い感覚をも鋭く研くことが出来る。しかも研けば研くほど、発達するのが常であります。(略)総ての感覚と云ふものは、何度も繰り返して感じるうちに鋭敏になるのであります。

意識的か無意識的かはまた別の問題として、
『文章読本』のこの様な文脈を織田は『西鶴
新論』の中に導入していたのではあるまいか。
実は前述した『西鶴新論』で『文章読本』

が引用される箇所とは、今引用した『文章読
本』の直前の箇所にあたる。『文章読本』は
織田にとってある一定の位置を占めていたと
いうことが推測できるのではなかるうか。そ
して谷崎と織田は同じく西鶴の作として『近
代艶隠者』だいやさいんじや 卷三「都のつれ夫婦」に言及して
いる。

『西鶴新論』では作品名のみで「都のつれ
夫婦」の本文の引用はないが、『文章読本』
では物語の前半部が引用されている。その部
分の概要は次のようになる。物語の視点人物
西鷺軒橋泉は年明けに住処である窟の中から
出て「男女老少あらそひこそり。桜が下に座
の儲けして遊ぶ」場面に遭遇する。しかしそ
の賑やかな人々と対照的な松の木隠に「その

体うるはしき男」と「色ある女」の姿を見つける。二人は酒で酔いをすすめ「時へて後彼女にもたせし包物を明けて。ちいさき春。ほそやか成杵を取出して二人手しらげけるが。また水を汲。火をきりなどして。あたりの散葉拾ふて。炊揚つゝ。是にも足よとて。たはふれ笑ひ。たのしげに食ふ」のであった。

この「都のつれ夫婦」と「夫婦善哉」との類似関係は指摘しておいてもよいだろう。二つの作品がともに題名に「夫婦」の文字を用い、その夫婦を主人公としている点がまず挙げられるし、「都のつれ夫婦」が杵でついた餅を食べる場面は「夫婦善哉」の最後の場面で「めをとぜんざい」を食べる蝶子と柳吉という枠組みと重ね合わすことができる。

『文章読本』が昭和九年の刊行であることを考慮に入れるならば、織田が「夫婦善哉」執筆以前にこの文に触れていた可能性は高い。

この点については「夫婦善哉」が浄瑠璃に加え食物を描くのと同様に、『文章読本』で

も「文章の味と云ふものは、芸の味、食物の味など、同じでありまして」(「二、文章の上達法 感覚を研くこと」)の言があることに注意しておきたい。とするならば先の「西鶴を本当に読んだのは「夫婦善哉」を単行本にしてからである。」という織田の言も織田が『文章読本』を読んだと思っっている場合には西鶴は読んでいないことになり、また『文章読本』の中の「都のつれ夫婦」を読んだと思う場合には嘘をついていることになる。このような織田の状況は彼の敬愛するスタンダールについての「スタンダールなど一生嘘を吐き通した作家だが、またスタンダールほど真実を語った作家は、さう沢山はない筈だ。」(注29)という言葉と一致していると言えよう。つまり「嘘」と「真実」という本来は相反するものが、どちらか一方を排除することなく同一平面で展開されているのである。

しかし、この「都のつれ夫婦」と「夫婦善哉」も必ずしも一致しているわけではない。

前者が「その体うるはしき男」と「色ある女」を中心人物とするのに対して、後者は浮気者の夫柳吉と気の強い妻蝶子を描いている。また「都のつれ夫婦」が引用される『文章読本』の前後の文脈も考慮に入れておく必要があるだろう。谷崎は「名文と悪文は紙一重」であり、「西鶴や近松のやうな独創性のない者が彼等の文章の癖を真似ると、多くの場合物笑いの種になるやうな悪文が出来上がるのであります。」とし、「一步を譲れば非常な悪文となりかねない」文章として「都のつれ夫婦」を引用している。西鶴「都のつれ夫婦」は安易にまねるべき文章ではないとされるのである。とするならば「夫婦善哉」と「都のつれ夫婦」は物語の枠組みについては類似関係にあるが、その内容や『文章読本』の言う文脈と正反対のことを遂行していることとなる。

以上の点については後に再度取り上げることにし、さらに別の角度から問題点を考察し

てみたい。

四

織田は「大阪論」(注30)で、大阪を語るために吉田文五郎を中心とした浄瑠璃の形遣いや棋士坂田三吉について語っている。その中にはさりげなく、自宅の「本棚の上の額縁にはいつてゐるのも、お園の頭の安つばい版画だ。」(注31)という言が漏されている。お園とは前述『艶姿女舞衣』の半七の妻である。

昭和元年から一九年までの『艶姿女舞衣』全三五回の公演の内、吉田文五郎は計二六回お園を演じている(注32)。このことを考慮に入れると、「大阪論」で文五郎を語ることは「夫婦善哉」を語ることなのではないだろうか。つまり、文五郎とはお園であり、お園とは蝶子であり、そして蝶子とは「夫婦善哉」と言えるからである。

そこで「大阪論」の中で 大阪 的として 語られた文五郎や坂田三吉の類似点を読解してみよう。織田は吉田栄三の「わてや文五郎は んみtainな阿呆はもうでまへん。」（注33）という言葉に呼応しつつ、次のように述べる。

栄三の言ふ「阿呆」がここにもひとりあるのである。さうして、この現世主義から見た「阿呆」にとつて、唯一のねがひとは、坂田の糟糠の妻が死の真実に言つた「阿呆な将棋を指すな。」といふ一事である。将棋だけは阿呆にならない、その他のことは阿呆で通す。これが坂田の一生なのだ。物欲なぞ問題ではないのだ。（注34）

文五郎や坂田三吉はともに己の「道」に関しては一級品で、その他のことには「阿呆」な人物として語られる。ここでも先に見てきた通り、織田の視野が相反するものを対立の

ままと統一する存在へと惹き付けられていることが見て取れる。織田の嗜好は引き裂かれたものから発散する強度へと注がれている。そしてまた「物欲なぞ問題ではないのだ。」の言が示すように、織田は物欲主義など既成の大阪的概念への嫌悪をも表明している（注35）。文五郎と「今時の若い者」との断絶についても他の箇所では言及している（注36）。つまり「大阪論」で主張される大阪は既成のそして現実に存在する大阪とは異なったものなのであり、単一の観念に集約されない、引き裂かれたものの混在する雑種的な場として考えられるのではなからうか。

また『近代艶隠者』の視点からも考えてみる。昭和一七年『西鶴新論』刊行直後の「西鶴論覚書」の中で織田は『近代艶隠者』に言及している（注37）。その中で織田は『近代艶隠者』の中に「老荘思想の影響が多い」という諸家の言を挙げつつも、しかし西鶴にとつては隠者の生活は共鳴するものではなく、

「珍しい存在」という好奇心の対象であったのであり、「無論、皮肉られてゐるのは、老荘思想であらう」と結論づける（注38）。織田にとって西鶴や『近代艶隠者』とは単体の統一された思想に収斂されるべきものではなかった。また実はこの「西鶴論覚書」の文章は直前に刊行されていた『西鶴新論』の一部を書き直した文章なのである（注39）。『西鶴新論』の中からこの部分が再び発表される必然性は、やはり前述した「夫婦善哉」と『近代艶隠者』巻三「都のつれ夫婦」との関連から類推すべきであろう。『近代艶隠者』は織田にとってゆずれない作品だったのではなからうか。

ではなぜこのように織田は引き裂かれた言葉やまたそのような思考形態を語る必要があったのか。このことは先に述べておいた『文章読本』との差異、または違和感から導き出せる。『文章読本』の序には次のような件がある。

云はゞ此の書（『文章読本』・引用者注）は、「われ／＼日本人が日本語の文章を書く心得」を記したのである。

昭和一〇年前後から論議される 日本的なもの という文壇の動向と呼応するようなこの『文章読本』のこのコンテクストを、「夫婦善哉」は錯乱に導くであろう。

「夫婦善哉」発表の昭和一五年の日本は言わば強烈な同一化の磁場であつた。この年は紀元二六〇〇年とされた。大川周明『日本二千六百年史』は「吾等は必ず歴史によつて日本の生命を支配する法則を掴まねばならぬ。而して此の法則に従つて行動せねばならぬ」と述べ、ナショナル・ヒストリーによる思想の統一化とその重要性を主張した（注40）。

この動きは思想のみの問題ではなく文学者の動きにも関連がある。「今年は、皇紀二千六百年である。」の序から始まる菊池寛『新日

本外史』(注41)などがこの文脈に連なるといえよう。昭和一五年とは、いわば歴史とその持続性があらゆる領域で最大限に提唱された年なのである。

このような動向へ異議を表明していたのが、中野重治「文学における新官僚主義」(昭12・3)である。その中で中野は「再び彼等(文学における新官僚主義、小林秀雄等を指す・引用者注)のいふことが正しいとすれば、日本は現在あるがままで至極明るいことになり、日本の現実生活は絶対相容れぬ二つのものに裂けた状態から調和ある純粋な統一物になることになり、私たちはそれに愛情をそそがねばならぬといふことになる」と述べる(注42)。中野にとって「日本の現実生活は絶対相容れぬ二つのものに裂けた状態」だったのである。これと関連して花田清輝が戦後『復興期の精神』としてまとめるエッセイ群を昭和一六年から連載していることも考慮に入れる必要があるだろう。花田の楢円の思想もまた

「二つの焦点のある、かれの分裂した心」なのであった（注43）。

本稿が考察してきた「夫婦善哉」の表現形態や織田の思考も、中野・花田のような、雑種的で分裂した言葉や意識という地平において再解釈できるのではなからうか。前掲「可能性の文学」の「小説形式の可能性を追求し」、

「あくまで不純であることが純粹小説だ」

（注44）という織田の言はそのようなコンテクストで読み解く必要があるように思われ

る。織田にとって物語の統一化を引き裂く言葉として「夫婦善哉」はあったのであろうし、またその引き裂く言葉は常に反復し、差異を産み出す場ともなっていたのである。

以上、織田作之助「夫婦善哉」から導き出される関係性について考察してきた。しかし織田については「夫婦善哉」以外の作品から更なる分析が必要であらうし、また織田のよくな思考形態と連関する 日本的なもの の議論や紀元二六〇〇年問題についても考察の

余地が多分にある。この点について日本浪漫派（注45）の存在は見逃すことができないであろう。問題が多岐に渡ったため今回は不十分な言及に止まったが、これらの諸問題については今後報告していくこととしたい。

注

- (1) これに該当する言は「文芸推薦作品審査会」（『文芸』昭15・7）での川端康成「見方が余り深くない」の言を筆頭に、青野季吉「『文芸推薦』審査後記」（『文芸』昭15・7）での「特に女の生き方がよく観て、よく描いてある」、武田麟太郎「『文芸推薦』審査後記」（『文芸』昭15・7）の「眼と才能」などの言がある。これに類するものにはその他に、杉浦民平「余りに戯作的な」（『帝国大学新聞』昭15・6・17）、Y・「『文芸』『新潮』作品評」（『文芸』昭15・8）、上林暁「若き世代について」（『新潮』昭15・8）などがある。またリアリズムからの評価には、中村光夫「若年作家と作品」（『東京朝日新聞』昭15・6・30）の「リアリズムといふ技法の欺瞞」の言や、平

野謙「リアリズムの頹廢 技術のみ徒に空転してゐる」(『帝国大学新聞』昭16・1・27)がある。
市井物については、無署名「文芸」(『三田文学』昭15・8)を参照。

(2) これに該当する言は、高見順「羞恥なき文学 文芸時評」(『文芸春秋』昭15・9)の「とつちゃん小僧」という揶揄を筆頭に、前掲の青野季吉、杉浦民平らの文や、川端康成の言にも見られる(注1を参照)。

(3) 杉山平一「解説」『夫婦善哉』角川文庫、昭和二九年一月、九二頁。

(4) 織田作之助「宗教への手掛かり」(初出未詳)。引用は『定本織田作之助全集 第八巻』文泉堂書店、昭和五一年、一八四頁。なお「夫婦善哉」の発表から約六年半年後の昭和二二年一月に織田は鬼籍に入った。このことから死の直前の文章と推測される。

(5) 織田作之助「小説の思想」『大阪朝日新聞』昭和五年六月一三〜一四日。

(6) 橋本寛之「織田作之助『夫婦善哉』論」『阪南論集 人文・自然科学編』二八巻一号、平成四年六月二

九日、七、一八頁。

(7) 多田道太郎「オダサクはんのめでたいユーレイ」『織田作之助』ちくま日本文学全集、平成五年五月二〇日、四六四頁。

(8) 織田作之助「夫婦善哉」『海風』六年二号、昭和一年一〇月一〇日、一一六頁。

(9) 『国立文楽劇場上演資料集・16』（国立劇場、昭和六二年一月三日）所収「『艶容女舞衣』上演史（年表）」によれば、昭和一〇年代に「艶容女舞衣」は東京と大阪がほぼ同じ割合で上演されている。同年表には昭和一五年の上演はないが、昭和一三年から一七年の五年間で一回の公演が確認できる。場割は「美濃屋の段」と「酒屋の段」が上演された昭和四年三月の明治座と同年四月の四ツ橋文楽座を除く全ての公演が「酒屋の段」のみを上演している。このことと関連して当時流布していた五行本などの稽古本もほぼ「酒屋の段」が中心であったと考えられる。ちなみに大阪府立中之島図書館織田文庫には『艶姿女舞衣 酒屋段』（加島屋清助書店、明治四四年）と『艶姿女舞衣 三勝半七酒屋の段』（久栄堂、大正

七年)の二冊の五行本が所蔵されている。

(10) 織田作之助「夫婦善哉」前掲『海風』一二二頁。

(11) 『江戸文学俗信辞典』(東京堂出版、平成元年七月一〇日)によれば「俗に丙午の年に生まれた女性は男を食い殺す」とされ、「女性の縁談の妨げとなっていた」とある。

(12) 頼桃三郎校訂『艶容女舞衣』岩波文庫、昭和一四
年一月二三日、三三三頁。

(13) 暁鐘成『浪華の賑ひ』(安政二年)によれば、「め
おとぜんざい」のある法善寺の南、妙見堂の東の傍
らには三勝半七の墓があると記されている(『日本名
所風俗図会10大阪の巻』角川書店、昭和五五年六
月三〇日の「妙見堂」の蘭を参照)。「夫婦善哉」の
作中にも法善寺の「めおとぜんざい」について「何
とか大夫ちゆう浄瑠璃のお師匠はんがひらいた店」
(前掲『海風』一四〇頁)という言がある。一方、
織田は「大阪発見」(『改造』二二巻一四号、昭和一
五年八月一日)で「めおとぜんざい屋」は「明治初
年に文楽の三味線引き」が開業したものだとも述べ
ている。真偽は別れるが、いずれにせよ「夫婦善哉」

と文楽、浄瑠璃、三勝半七、『艶姿女舞衣』には何らかの関連があると推測される。

(14) 瀬戸内晴美・前田愛「『夫婦善哉』と織田作之助」

『対談紀行 名作のなかの女たち』・同時代ライブラリー・岩波書店、平成八年一月一日、三〇一頁。

(15) この引用部分は前掲「大阪発見」に該当箇所がなく、後に加えられたものと考えられるが、初出未詳のため前掲『定本織田作之助全集 第八巻』二三八頁を参照した。

(16) 黒木勘蔵「解題」前掲『日本名著全集二八巻 歌謡音曲集』昭和四年一月二〇日、四九〜五〇頁。

(17) 織田作之助「夫婦善哉」前掲『海風』一四〇頁。

(18) 前掲、瀬戸内晴美・前田愛「『夫婦善哉』と織田作之助」(三〇二〜三〇五頁)では、この最後の挿話について、瀬戸内は「なくていいような気がする」とするが、前田は「安定のシンボル」として作品に不可欠な要素と主張している。

(19) 大阪府立中之島図書館織田文庫所蔵「夫婦善哉」草稿は、四〇〇字詰め原稿用紙一種類(「東京文房堂製」の表記があるもの)と、二〇〇字詰め原稿用紙

四種類 (a) 「T.SNO18」の表記があるもの (b) 「松屋製」の表記があるもの (c) 無地でマス目のみのもの (d) 「形ヤマト印原稿箋」の表記があるもの () の計五種類の原稿用紙がある。

(20) 「5」の頁数が付された草稿は二〇〇字詰め原稿用紙のものが計三枚あるが、その中の一枚は(a) (注19を参照) で、残りの二枚は(b) (注19を参照) のもの。本論では(b)の二枚について言及している。

(21) 「10」の頁数の付された草稿は計四枚ある。その内の三枚は(b)のもの (注19参照)、残る一枚は「東京文房堂製」と記された四〇〇〇字詰め原稿用紙のもの。本論では(b)の三枚の内的一枚について言及している。

(22) 「絵本太功記」『日本名著全集 第七巻 浄瑠璃名作集 下』昭和四年二月四日、九七九頁。

(23) 織田作之助『西鶴新論』修文館、昭和一七年七月五日、一一頁。なお本作は第一章のみが『大阪文学』(昭17・5)に発表された。その他の章は全て書き下ろし。

(24) 小田切秀雄「織田作之助著 西鶴新論」(『都新聞』昭和一七年九月二一日 二〇日夕刊)には「私は西

鶴の、又リアリズムのこのやうな理解の仕方の中に、低調な小説「夫婦善哉」の作者の西鶴をかりての自己の創作態度の弁護をみるのである」の言がある。

- (25) 前掲瀬戸内晴海・前田愛『「夫婦善哉」』と織田作之助「は西鶴と「夫婦善哉」の関連を指摘し、一方、前掲杉山平一「解説」は「夫婦善哉」執筆時の織田は「西鶴を意識していませんでした」(九四頁)と述べている。

- (26) 「杉山平一宛書簡」前掲『定本織田作之助全集 第八巻』四一三頁。

- (27) 以下、谷崎潤一郎『文章読本』の引用は昭和九年一月五日刊(中央公論社)を定本とした。

- (28) 前掲織田作之助『西鶴新論』七四―七六頁。

- (29) 前掲織田作之助『西鶴新論』一一頁。

- (30) 織田作之助「大阪論」(初出未詳)。織田作之助『大阪の顔』(明光堂書店、昭和一八年九月二〇日)に再録。以下、「大阪論」の引用は全て『大阪の顔』所収本文に拠った。

- (31) 織田作之助「大阪論」前掲『大阪の顔』三頁。

- (32) 前掲『国立文楽劇場上演資料集・16』所収の「艶

容女舞衣」上演史（年表）」を参照。

- (33) 織田作之助「大阪論」前掲『大阪の顔』六頁。
- (34) 織田作之助「大阪論」前掲『大阪の顔』四八頁。
- (35) その点については、織田作之助「大阪論」前掲『大阪の顔』の二三頁も参照。

(36) 織田作之助「大阪論」前掲『大阪の顔』二一頁。

(37) 昭和一年の時点で『近代艶隠者』が西鷺軒橋泉作であるなどの考証がある（野間光辰「近代艶隠者の考察」『国語・国文』昭和一年八、九月を参照）。

しかし橋泉の経歴が不明であったため確定はできなかった。前掲、織田『西鶴新論』の西鶴年譜でも貞享三年正月「近代艶隠者」の欄に「（西鶴作か否か考証の余地多し。）」（二八〇頁）の言があり、『近代艶隠者』が西鶴の作か否か微妙な位置にあったことがわかる。この点を考慮するならば、「西鶴を本当に読んだのは「夫婦善哉」を単行本にしてから」という織田の言も『近代艶隠者』が西鶴作ではないという可能性の中で許容できるものとなるし、また反対に『近代艶隠者』が西鶴作であるという可能性の中では嘘として機能するという仮説も成り立つ。その後、

野間光辰「新出西鶴書簡をめぐって」(『国語・国文』昭和二九年一〇月)などで橋泉が実在の人物であったことが確認され、現在では『近代艶隠者』は西鷲軒橋泉の作とされている。

(38) 織田作之助「西鶴論覚書」『上方』一三九号、昭和一七年七月二五日、三〇三六頁。

(39) 前掲織田作之助『西鶴新論』六五〇六七頁を参照。

(40) 大川周明『日本二千六百年史』第一書房、昭和四年七月五日、四頁を用いた。

(41) 菊池寛『新日本外史』非凡閣、昭和一五年三月十六日。

(42) 中野重治「文学における新官僚主義」『新潮』三四年三号、昭和一二年三月一日、一〇七頁。

(43) 花田清輝「楳円幻想」『文化組織』四二号、昭和一八年一〇月一日、一五頁。その後『復興期の精神』(我観社、昭和二一年一〇月五日)に所収された。

(44) 織田作之助「可能性の文学」『改造』二七卷二号、昭和二一年一二月一日、九二頁。

(45) 本稿との関連で、織田には日本浪漫派を意識していた形跡がある。前掲『定本織田作之助全集 第八巻』

「書簡（補遺）」所収、昭和二〇年五月から一〇月の川島雄三宛書簡（四通）では、日本浪漫派をもじった「日本軽佻派」を、織田が自任していたことがわかる。

本稿で引用した織田作之助の文章は、特記したものを除いて全て初出本文を底本とした。

（付記）

なお「夫婦善哉」草稿および旧織田作之助所蔵本の閲覧にあたっては、大阪府立中之島図書館織田文庫の御協力を得た。貴重な資料を提供して下さった中之島図書館および同図書館大阪資料・古典資料室の皆様深く御礼を申し上げます。

西村将洋氏は同志社国際中学校・高等学校非常

勤講師です。

横書きページへはブラウザの「戻る」をクリックしてください。

